

Title	東南アジア近代における文化の自画像の形成
Author(s)	関本, 照夫; 内堀, 基光; 田村, 克己; 清水, 展
Citation	重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて (1996), 20: 76-83
Issue Date	1996-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/187590
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

東南アジア近代における 文化の自画像の形成

1. 研究組織

研究代表者：関本 照夫（東京大学東洋文化研究所・教授）

研究分担者：内堀 基光（一橋大学社会学部・教授）

田村 克己（国立民族学博物館・助教授）

清水 展（九州大学大学院比較社会文化研究科・教授）

2. 研究のねらい・目的

平成7年度の研究は、前年度の研究の延長上にある。そのため、前年度の繰り返しになるが、この研究のねらいと目的をまず述べてみたい。

この研究は、近代東南アジアの諸地域において「われわれの文化」という観念がどのように形成され、また発展しつつあるかを問うものである。今日、「文化」という観念は、人類史を通じ時と場所を異にするあらゆる集団に適用される。われわれは「縄文文化」「江戸町人文化」「古代ローマ文化」「ルネッサンス文化」等々の概念を、自明のものとして論じている。だが一方で、あまり意識されぬが同じように自明なのは、現在のような「文化・culture」の用法が西欧近代に起源し、古くとも18世紀末以前には遡らないことである。

もちろん近代以前にもさまざまな人間集団が、別の集団との対比において「われわれ」意識をもち、「われわれの流儀・習慣」などについて語ってきたであろう。単に表現が変わっただけで中身は変わらないという見方も、可能かも知れない。しかしわれわれは、近代西欧に生まれその後世界中に伝播した文化という語と、この語をもちいて「われわれ」を語る制度とともに、重要な変化が起き新しいものが生まれたと考える。今日に至る近代世界の編成は、この概念・言説制度を近代特有のものとして生み出し、また、それに影響されている。「古代クメールの文化」等々を論ずるのはもちろん重要な意味のあることである。だがそれとは別に、西欧近代起源の概念と言説が世界中に流行し、あらゆるレベルの政治共同体が文化を語ることによって自己と他者を語り規定しあっている現状を、近代の世界史の問題として検討したいのである。文化は外部から客観的に発見される「もの」のようなものではなく、集団的自意識、あるいは集団的であることを主張する自意識として、近代の歴史のなかにこそ存在する。それはまた、近代世界における「地域性」というものを考える重要な手がかりともなるはずである。

東南アジアにおいて、文化の概念はまず西欧の語彙として、西欧植民者・東洋学者の手によって普及した。諸地域にそれぞれ固有の文化なるものを見い出していく制度は、植民地支配の対象である従属的な他者を作り出すに不可欠の手段であった。同じ概念はまた、外来語として、あるいはやがて各地に生まれる国語のなかに翻訳されて、支配される側の自己規定の言葉となり、ナショナリズムの言説の核となり、さらには、さまざまにレベルの異なる顕在的・潜在的な政治共同体が自己を形作るのに欠かせないものとなっていた。文化という概念と言説の起源、歴史的展開、現状の研究を通じ、東南アジアの近代が西欧起源の普遍的制度にどう反応し、外に対する内であるはずの自己を、またさまざまに区別される国や地域を、いかに想像し作りだしているかを検討するのが、われわれの目的である。文化は歴史のなかで形成され、また歴史の展開に影響する一つの作用・効果である。文化概念を研究者の側の視点で実体化する時に生まれる恣意性を避けるため、文化がそれぞれの地域や集団のなかでどう語られてきたかを問題とする。

問題は、東南アジア近代の全体に関わる非常に大きいもので、今回の研究は予備的なものと考えている。研究代表者と各分担者は、これまで各人の研究蓄積を生かして、特定のテーマを定め、部分から事例を積み上げて行く方向をとっている。その具体的内容は次節以下に述べる。

3. 平成7年度の研究経過

本年度は研究会を重ねるとともに、代表者・分担者各人がそれぞれ、科研費国際学術研究などの別の財源を活用し、東南アジア各地での調査・資料収集を行った。インドネシアの伝統染物産業についての現状調査と歴史資料収集、東南アジア各国における博物館、文化振興政策、文化フェスティバル、文化的モニュメント造りなどをめぐる調査と資料収集、フィリピン・ピナトゥボ火山の大災害以降、危機にある民衆の中から文化的自意識が新たに生まれる過程の調査などが、本年度の主な活動だった。

研究会は以下のように4回行われ、研究代表者・分担者に加えて外部からの招待講演者も加え、議論の場を持った。

第1回研究会：6月22日

来日中のライデン大学マレー・インドネシア言語文学講座教授 Henk Maier 氏を講師に招き、“Writing Malay Literary History”と題する発表を受けた。従来正統的であるような、著名なマレー語テキストをたどる編年の歴史から視角を大きく転換し、地域と時代を越えたマレー語的想像力の歴史をたどろうとする氏の構想は、東南アジアの近代に新しい語彙や概念が生まれ

てくる過程を探る我々の研究にとって、啓発的なものであった。

第2回研究会：10月29日

まず関本が、「インドネシア近代におけるバティック産業の発展と伝統文化像の変転」の題で発表した。発表は、今日のインドネシアと世界で、この国の「伝統文化」を代表するものとされているバティックの伝統が、近代の経済発展、競争、技術革新、国際的な人と物資の流れ、さらにはナショナリズムや国家形成の過程で、いかに変容・発展してきたかを明らかにし、伝統の変容がすなわち伝統の形成であることが強調された。その一部は、『総合的地域研究』10号に発表されている。

ついで清水は、「フィリピン・イメージの再生産」と題する発表を行い、戦前期以来日本の出版物に現れてきた「陽気で楽天的だが平気で嘘をつき信義に欠けるフィリピン人」というイメージを、歴史的にたどり、アメリカにおけるフィリピン像、フィリピン知識人層に見られる対抗言説などと比較しながら、外から与えられるイメージと自己像との相関や葛藤について考察した。その一部は『比較社会文化』誌に発表された。

第3回研究会：1月27日

まず内堀が、本年度マダガスカルで行った調査に基づき、「マダガスカル人の自画像」の題で、当地の文化状況について報告を行った。公式に18あるとされる諸部族、方言差、地域差、宗教による分化にも関わらず、言語文化的に均質性が高いこと、アフリカとアジアのはざまにありながら、アジアへの無知・無関心、アフリカへの漠然とした侮蔑・恐怖が広く見られること、などが示された。

次に田村は「ビルマにおける文化の自画像」の報告を行った。そこでは、政府の文化政策の面で、外国文化に対する文化の防衛、伝統衣服、伝統芸能の育成が強い言葉で強調される一方、かならずしも他者との交渉や葛藤の中で強烈な文化のダイナミズムが発生するわけでもない、ビルマ特有の事情が明らかにされた。

第4回研究会：2月17日

2名の講師を外部から招いて研究会を行った。まず、鏡味治也氏（金沢大学文学部）より、「バリ島の慣習組織コンテストと民族文化の再構築」の発表を受けた。そこでは、近年のバリ地方政府による地方文化振興政策の諸相が明らかにされ、とりわけ毎年全島で組織される慣習組織＝村の間のコンテストが、政府の設けた詳細な審査項目によって組織される実体が詳しく語られた。こうして、国のレベルで「文化」「慣習」等に整然たる規定が与えられ、国民国家の枠組の下で、地域の「生きられてきた文化」が意識的に語られ規定される「地方文化」に変

容していくバリ、そしてインドネシアの状況が、詳細なデータによって明らかにされた。

ついで梶原景昭氏（北海道大学文学部）により、「民主主義の文化的諸相」と題する発表が行われた。発表はまず、「民主主義」概念一般がもつ普遍性とあいまいさにふれ、ついで「民主主義の国」であることに強い自負心をもつフィリピンにふれて、その民主主義のもつ限界を論じ、民主主義に必要な社会文化的「インフラストラクチャー」とは何かという問題が提起された。

さらに研究代表者・分担者はそれぞれ以下のような研究活動を行った。

関本は昨年に続き、科研費（国際学術研究）「東南アジア島嶼部における国民文化と地方文化の相関的動態に関する文化人類学的研究」（代表・東京大学・山下晋司）に加わり、11月6日より12月30日までインドネシア・ジャワ島において、19世紀後半以来のパティック産業の社会史と現状の民族誌的調査を行った。調査は、20世紀前半の蘭領東インドで発行されていた新聞雑誌類から、パティック関係の記事を探索すること、インドネシア・パティック協同組合連合本部と各単組、工業省パティック研究センター、各大学図書館などでのパティック関係史料の収集、パティック生産者、企業、商人、市場などの訪問調査を中心に行い、産業・市場の社会経済史と、パティックをめぐる言論・世論を探った。これと合わせ、主に現在発行されている新聞雑誌類の検討や文化・芸術関係者とのインタビューを通じ、インドネシアにおける文化的な意識と実践の現状を探った。成果の一端は、第2回班研究会で発表するとともに、『総合的地域研究』誌、『創文』誌などに発表した。

内堀は、前年度に引きつづき、マレーシア連邦サラワク州における諸集団がみずからの「文化」をどのように語るか、あるいは語り始めているかにつき、主として文献にもとづく調査を行なうとともに、科研費（国際学術研究）「インド洋西域諸社会における伝統の創出」（代表・一橋大学・長島信弘）の一環として、マダガスカル共和国内のベツィレウ社会の予備調査（10月5日－11月5日）を行なった。さらにこの調査の帰途、サラワク州においてイバンの居住地に作られた多目的ダム、およびダムの完成とともに設置された観光施設が住民の生活に与えつつある影響、とりわけ観光施設における雇用とロングハウス観光ツアーからの現金収入が自文化意識の促進に及ぼす効果について、短期間ながら見聞する機会を得た。

田村は、数回に渡りベトナム、タイ、ビルマ等に調査に赴き、各国の文化政策と文化意識を探った。また、11月には国立民族学博物館において国際シンポジウム「文化の生産」を主宰し、現代の国民国家形成、政治経済環境の急激な変化、さらにはグローバル化の流れの中で、各地で文化がどの様に生産され、またそれが権力といかに関わっているかについて、3日間の討論

を組織した。シンポジウムの成果は近いうちに刊行される予定である。

清水は、ルソン島・ピナトゥボ山の噴火がもたらした受難、とりわけ故郷喪失という体験をめぐるアエタ個々人の語りを、昨年度までに計50人ほどから採録し、サンバル語およびタガログ語の文字テキストに起こしてきた。それらのテキストは、彼らが、再定住地での新生活において、政府や援助団体の職員との交渉や平地民との交流をとおして、アエタであることの自意識や集合的な民族としての自覚を強めていることを明白に示している。今年度はそれらのテキストの編集作業をおこない、『Kasaysayan ng Erupsiyon（噴火をめぐるイストリア：民族の意識の生成）』と題して、フィリピンで出版する準備を進めた。アテネオ・デ・マニラ大学出版会から前向きに検討するとの返答を得ており、噴火5周年の96年6月までに最終稿を完成することをめざしている。また噴火後の彼らの民族的な自覚の高まりについては「生成過程のただなかにある新たな民族自画像の作成作業」と捉え、その詳細な分析が続けている。それらの最終的な詰めの作業のために、2月末から1ヶ月間ピナトゥボ地域の再調査を行った。

清水はまた日本で流布しているフィリピン社会・フィリピン人のイメージが、フィリピン人自身の抱く自己意識、とりわけ知識人が描くフィリピン社会・フィリピン人の像といかに乖離しているかについての研究に取り組み、成果を第2回班研究会で発表するとともに、『比較社会文化』誌に寄稿した。すなわち、日本においては、「陽気で楽天的だが平気で嘘をつき、信義に欠けるフィリピン人」というイメージが先の大戦時から急速に広まり、今日に至るまでほとんど変化せずに保持されている。それらのステレオタイプのフィリピン人像は、テレビ・ドラマ、漫画、小説、さらには婉曲な表現ながら研究者の書いた論文や著作にいたるまで一貫して顕著に見いだされる。そして研究者の場合には、アメリカ人が英語で書いたフィリピン社会・フィリピン人の分析考察に大きな影響を受けている。そうした外部からの眼差しや決めつけに対して、フィリピン人の研究者たちは激しく反発し、逆にスペイン支配期の民衆反乱から、反米闘争、日本軍政へのゲリラ戦による抵抗、農地解放を求めるフクバラハップの乱、さらには反マルコス運動から「二月革命」にいたるまで、フィリピン民衆の個々人が、「人」としての尊厳と民族の自主独立を獲得するための抵抗が続けてきたことを強調する。そして主としてアメリカの研究者が、「明るく社交的あるいは友好的」な側面にのみ着目するのは、主体性なく植民地支配に迎合することを必要とするフィリピン人像を捏造することで、結果として新植民地主義的な支配を正当化する陰謀に加担してきたと糾弾する。フィリピン人の研究者や知識人にとって、真のフィリピン社会あるいはフィリピン人とは、真の解放と自己実現を求めて「未完の革命（unfinished revolution）」を戦い続けること、言い換えれば未来への投企の

なかに形成されつつ存在として意識され、描かれているのである。フィリピン社会・フィリピン人の像をめぐる外と内の認識のギャップが明らかになった今、その懸隔をいかに埋めるかが今後の課題である。

4. 研究の成果とフロンティア

さしあたり本年度の研究で得られた成果は、以下の3点にまとめることができる。

1、インドネシアの伝統染物産業については、3年前から続けている調査を通じ、多くの新たな文書資料が集まり、また、現段階における、都市中間層の消費文化発展とも関わる、文化商品としてのバティックの新しい差別化の様相を、知ることができた。ジャワを中心とするバティックは、インドネシア文化を代表する文物の一つとして、国内で、また国際的に知られている。調査からは、現在のバティックの伝統のかなりの部分が、19世紀末以来の技術革新、国際的な競争の中で発展してきたこと、近代化による伝統が脅かされているという今日のインドネシアに広く見られる意識は、現在見られるような伝統がまさに発展の渦中にあった今世紀初頭には、すでに強烈に存在していたことが明らかになった。伝統の変容がすなわち伝統と伝統意識の形成過程にほかならず、なんらか固定した地域の伝統がまずあり、ついでそれが近代に変容するという継時的見方は、それ自体が近代のイデオロギーである。

2、今日の東南アジア各国における、博物館、文化振興政策、文化フェスティバル、文化的モニュメント作りなどについて多くの観察と資料が集まり、文化表象の根本的な政治性、文化をめぐる人の集団間の表面に見えぬ闘争について、知見が深まった。これと関連し、フィリピンの例に典型的に見られるように、政治的・経済的に優位にある外部の国や集団の眼差しへの屈伏と抵抗とが、文化の自画像を屈折し重層化したものにし、また文化のダイナミズムをも生んでいることが、より詳細に明らかになった。

3、危機にある民衆の中から文化的自画像が新たに生まれる過程について、フィリピン・ピナトッボ山のネグリート系住民の例から、知見が深まった。故郷喪失、再定住地での新しい生活、国内外のマスコミや援助団体との接触などの新しい経験が、住民の間にアエタ意識を再構成していく現在進行中の過程から、重要で興味深い研究成果を得ることができた。現在までの成果は、それぞれは直接に有機的関連の無い幾つかの事例の集積である。歴史的背景に目を配りながら、現在進行中の文化状況を探るというこの研究課題は、今後もさらに多くの比較事例を集めながら、文化についての新たな理論化を図る方向で、継続されねばならない。重点領域研究の一環としての研究活動は、本年度で終了するが、今後も代表者・分担者のそれぞれが、

単独で、また可能な共同の形態で研究を続けて行きたい。現在までの個々の成果は、各人がすでに発表したり、さらに今後の発表を予定しているが、総論的なもの、および資料的部分については、この研究班の共同の成果として、来年度中になんらかの形でまとめ発表したいと考えている。

5. メンバーの研究業績（平成7年度発表分）

関本照夫

事典項目「東南アジア－社会統合」『ブリタニカ国際大百科事典』（全面改訂版）TBSブリタニカ，1995.

「バティック産業の経済と文化」『創文』368号：18-21，1995.

事典項目「ジャワ人」「スリナム」『世界民族問題事典』平凡社，1995.

日本の人類学と日本史学」『講座日本通史別巻1・歴史意識の現在』岩波書店，pp. 123-147，1995.

「インドネシア近代のバティック産業の事例－文化の自画像の生成」『総合的地域研究』10号：38-42，1995.

"Uniforms and Concrete Walls: Dressing the Village under the New Order." In *Outward Appearances: Dressing State and Society in Indonesia*, ed. by Henk Schulte Nordholt, Leiden, KITLV, (forthcoming).

内堀基光

「日本の文化人類学はありうるか」『文化人類学』2号：14-15，1995.

「歩くことと連帯（鶴見良行著『ココス島奇譚』『東南アジアを知る』書評）」『週間読書人』1996年2月3日第1面.

田村克己

「仏教の周縁にて－ビルマのナツとガイン」田辺繁治編『アジアにおける宗教の再生－宗教的経験のポリティクス』京都大学出版会，pp. 131-151，1995.

「文化の生産」『月刊みんぱく』1996年2月号：18-19.

「宗教体系と民族誌記述の方法」『民博通信』71号：69-73，1996.

清水 展

「尊厳と和解、そして『不在の正義』：フィリピン社会の秩序」清水昭俊編『洗練と粗野：社会を律する価値』東京大学出版会，pp. 97-115，1995.

「再臨する宗教・再生するデモクラシー：フィリピン『二月革命』とカトリシズム」田辺繁治編『ア

ジアにおける宗教の再生：宗教的経験のポリティクス』京都大学学術出版会, pp. 403-411,
1995.

「日本におけるフィリピン・イメージ考」『比較社会文化』第2号：15-26, 1996.